

20210707

イワン・クラステフ、スティーヴン・ホームズ『模倣の畏——自由主義の没落』（中央公論新社、2021年）。

数ヶ月前にいただいてからしばらく「積ん読」にしていたが、このほど時間を見つけて読んでみた。鋭い洞察と乱暴な立論とが奇妙に同居しており、評価の難しい本だというのが全体的印象である。全体の構成として、第1章は中欧（主にハンガリーとポーランド）、第2章はロシア、第3章はアメリカ（トランプ期）、終章は中国を主題としている。それ以外の諸国や地域にもときおり触れているとはいえ、こういう構成を取ると、あたかもこれらの国だけに特異な問題があるかのイメージが浮かびやすい。しかも、オルバン、プーチン、トランプ、習近平といった指導者の名前が頻出するため、そうした「悪玉」に主要な責任があるのだという受け止め方を誘発する面がある（よく読めば、それだけでない面にも触れており、こうした図式で受けとめられるのが著者の本意ではないはずだが）。

もう一つ、「西洋的な自由主義と民主主義」という言葉遣いが各所に出てくるのが目についた。自由主義と民主主義（そしてついでに言えば資本主義も）は単純にイコールではなく、むしろ緊張をはらんだ微妙な相互関係にあるが、「自由主義と民主主義」とひとまとめでした表現が繰り返し使われると、それらがあたかも一体のものであるかの印象を残す。現実の「西洋」諸国でこれらの価値がどこまで現実化しているのかという疑問もあるし、そもそもどうしてこれらの価値を「西洋的」と呼ぶのかという根本的な疑問も浮かぶ。

ソ連末期から現代ロシアに関わる叙述についていうと、ゴルバチョフとエリツィンの対抗関係にごく部分的にしか触れておらず、あまり両者を区別していないかの印象を残す。もっとも、細部を気にしながら読んでみるなら、エリツィン時代におけるリベラル・デモクラシーからの乖離にも触れられているし（1993年の議会砲撃など）、また1996年大統領選挙に際して、アメリカの選挙コンサルタントがエリツィンを勝たせるために「汚い」手法を教えたことにも触れられており、手放しでエリツィン期を「民主的」としているわけではない。

現代の中国とロシアに関しては、両国の政治が権威主義的であることは明らかだが、全世界を自己の理念に沿って作り直そうという普遍主義的イデオロギーをもってはおらず、その意味で冷戦期とは異なると指摘しているのが興味深い。考えようによっては、「われわれは自由と民主主義という「普遍的価値」を全世界に広める使命を帯びている」と唱える人たちの方がイデオロギー的かもしれないという気もする。

こういうわけで、どの個所に注目して、どういう読み方をするかによって、印象が相当大きく変わる。どんな本にも共感できる部分とそうでない部分とがあるのは当たり前の話だが、本書の場合、その落差が極端であり、全体としてどう受けとめるべきかに戸惑いが生じる。とにかく、読む人の頭を刺激して、ものを考えさせるという意味では有意義な本というべきだろう。

20210720

『木下順二集』第6巻（岩波書店、1988年）に収録されている『冬の時代』という作品を読んだ。

この戯曲は、元来、雑誌『展望』1964年10月号に掲載された（演劇としては同年9月に

劇団民芸によって初演)。当時高校生だった私は、何となくこの雑誌の雰囲気が好きで、大人の雑誌を背伸びして読みたいという気分もあって、わりとよく読みかじっていた。この作品も、多分、発表後まもない時期に読んだという漠然たる記憶がある。今回改めて読んでみようと思いついたのは、単なる昔懐かしさのせいだけではなく、昨今の情勢が「冬の時代」のように感じられるところがあり、そういう時代状況の中をどうやって生き抜くのかという問題を考える上でなにかのヒントになるのではないかという気がしたせいでもある。

作品の主題は、大逆事件（1910年）直後の時期の日本における社会主義者たちが厳しい弾圧の中でどう生き延びるかをめぐって重ねた種々の模索である。登場人物のモデルは、堺利彦、大杉栄、荒畑寒村、高島素之、山川均らであり、中でも堺（作中では「洪六」というニックネーム）が中心的な位置を占めている。途中まで読んですぐに気づいたが、現在の状況は当時とは大きく異なっている。主人公たる「社会主義者」という存在が今ではすっかり時代遅れなものになっている上に、ここで描かれているような苛烈な弾圧は少なくとも表面上姿を消したといった面に注目するなら、これを現代に重ね合わせて考えることはできそうにない。もっとも、目に見える激しい弾圧の代わりに、「忖度」や「同調圧力」による真綿で首を絞めるような圧力は強まっているような気もする。われわれは当時とは大きく異なった形での新たな「冬」を生きているということになるのかもしれない。この作品が元来書かれた1960年代には、ここで描かれた「冬の時代」は既に過去のものとなっており、「冬の次には春がやってくる」ということを作者も読者（演劇の場合は観客）も意識していて、「きっと春が来るのだから、それまで耐えぬいて頑張ろう」と考えることができた。しかし、今日の状況を「かつてとは違った新しい冬の時代」と考える場合、「次には必ず春が来る」という確信をいだくことはできない。地球の気候変動のせいで、四季の移り変わりさえも予測を超えた変化をするかもしれない。そんな風に考えると、この作品をそのまま今日の教訓とすることはできないのではないかという気がしてくる。しかし、視点を変えて、まだ先の見えない状況の中で苦しんでいる人たちが自暴自棄とか冒険主義に陥ることなく、志と希望と幾ばくかのユーモアを持って生き抜こうとして模索しているさまを描き出した作品と考えるなら、これはこれでやはり学ぶところがある作品であるようにも思える。われわれは「新しい冬の時代」を何とかして生き延びることができるだろうか。

20210731

鶴見太郎『イスラエルの起源——ロシア・ユダヤ人が作った国』（講談社選書メチエ、2020年）。

刊行後長らく「積ん読」にしていたが、このほど何とか時間を見つけて、ようやく読みあげた。私は今から半世紀近く前に原暉之の先駆的な論文「近代ロシアにおけるユダヤ人およびユダヤ人問題」（『愛知県立大学外国語学部紀要（地域研究・関連諸科学編）第8号、1972年）を読んで以来、ユダヤ人問題の複雑さと面白さに取り憑かれてきた。その後、高尾千津子、野村真理、長尾広視らの優れた研究が続出し、日本のユダヤ史研究はかなり進んできた。本書の著者鶴見太郎は彼らに続く若手で、『ロシア・シオニズムの想像力——ユダヤ人・帝国・パレスチナ』（東京大学出版会、2012年）で颯爽と学界デビューした。私は

同書の登場に強い刺激を受け、長めの書評を書いたことがある（『思想』2012年5月号、後に『ナショナリズムの受け止め方——言語・エスニシティ・ネイション』第9章に収録）。本書はその著者の第2作である。

本書の「はじめに」では、「かわいそうな被害者」としてのユダヤ人イメージと、パレスチナ人を抑圧する好戦的なイスラエル国家というイメージの関係をどのように理解するかという問題が提起されている。そして、軍事的志向をもつイスラエル国家の起源はホロコーストによって生まれたというよりも、もっと古い時期に遡ることを指摘して、かつて世界のユダヤ人口の大きな部分を包括していたロシア・ユダヤ人の思想的遍歴を追うことでこの問題に迫ろうとしている。ロシア・ユダヤ人の中には、他者との柔軟な共生を考えていたリベラルな部分も少なくなかったが、やがてユダヤ人として孤高に生きることを志向するシオニストが現われ、さらには軍事志向の強いイスラエル国家建設を担う部分が登場したことが論じられている。

本書の一つの特徴は、何人かの具体例に即してその個人史を丹念に追求する作業に大きな精力を注ぎ込んでいる点にある。それほど知名度が高いわけではない個々人の知的遍歴を追う作業には多大な労力が必要とされたものと推察される。また、もう一つの特徴として、「内なる国際関係」と題された第一章で、社会心理学の知見を応用して個人の内部を分解して考える視点が打ち出されているのが興味深い。国際関係に関するリアリズムが個人よりも民族や国家といった単位を重視するというのはよく指摘されることだが、それを批判するリベラリズムもまた「民族」という枠を与件とした上でそれらの共存や協調を説く傾向がある。これに対して著者は個人をさらに分解して一人一人の人間が複合的な側面をもつことに注目している。「ユダヤ人」というのは「自己」の中に含まれる一つの側面であり、ユダヤ・ロシア人の場合で言えば「ユダヤ人」性と「ロシア人」性は単純なゼロサムではない複合的な関係にあったという。こうした見地に立って、「併存型」「融合型」「不協和音型」「矛盾型」「相補型」という型が析出され、それが個々のユダヤ人について考える上でのキー概念とされている。もっとも、第二 - 六章の記述は必ずしもこの類型論で一貫しているわけではなく、具体例への類型の適用は部分的なものにとどまっている観もあるが、とにかく興味深い試みである。

本書をいただいてからしばらく「積ん読」にしているあいだに、イスラエル・パレスチナ紛争が再び激化したり、イスラエルでネタニヤフ首相が退陣して新しい連立政府が成立したりといった経過があったが、そうした情勢の中で本書を読んだことはタイムリーな読書となった。私個人の関心から言うなら、ソ連国内に残ったユダヤ人のソヴェト時代における曲折に富んだ歴史にも立ち行ってほしいという気がしたが、これは「イスラエルの起源」を課題とした本に対する無い物ねだりに過ぎない。

小さいことだが、本書で一貫して使われている「リベラリスト」という表現が多少気になった。手もとの英英辞典には *liberalist* という単語は載っておらず、それより大きい研究社の英和辞典には一応載っているが、「日本語の「リベラリスト」に当たる英語は *liberal* が普通。*liberalist* の使用頻度は低い」という説明がついている。

（追記）。著者は自著の反省点についてブログに書いている。刊行してまもない著作についてこのように率直な反省を書くのは著者の知的誠実さを物語る。

20210804

夏バテで心身ともかなり疲労が蓄積したので、息抜きに、宇佐美まこと『羊は柔らかに草を食み』（祥伝社、2021年）という小説を読んだ。

認知症が相当進行した高齢女性に友人たちが付き添って、ゆかりの地への旅をして過去を探索し、主人公の「心のつかえ」をときほぐそうと試みる物語。「老い」という主題にせよ、「過去への探索」——あまりに悲惨で目を塞ぎたくなるような事柄に、どう向き合うか——という主題にせよ、私自身の関心事と重なり合うところが大きく、読んでいるうちにかなり引き込まれた。過去の出来事としては、満洲からの引き揚げ経験が主要な位置を占めており、その苦難を子供の目線——といっても、ただ単に「かわいそうな被害者」というだけでなく、生き延びるためには否応なしにたくましくならざるを得ず、時として非道な行為にも自ら手を染めざるを得ない——に即して描いている。このような対象設定は、バーシェイや富田武の描く日ソ戦争・抑留・引き揚げにまつわる「下からの声」を思い起こさせるところがある。また、敢えてかけ離れた例を引き合いに出すなら、悲惨な体験を持つ「小さき人々」の声を掘り起こしたスヴェトラナ・アレクシエーヴィチの一連の作品とも相通じるところがあるような気もする（もともと、それらの文献が生声を掘り起こしているのに対し、この小説は純然たるフィクションという点では大きく性格を異にする）。

この作品は相当シリアスな内容を持つ一方で、ミステリー仕立てで書かれていて、エンタメ小説として読める面もある（作者は元来、そういう方面での作品が多いらしい）。最後の方であかされる「秘密」はあまりにも重すぎて、思わず絶句させられるが、そのわりにはあまり暗い印象を残さない。これもミステリー仕立てで書かれていることと関係しているのかもしれない。「純文学」として読もうとすると、「あまりにも話がうまくできすぎていて、リアリティに欠ける」という批評が生じる余地があるが、むしろ「直木賞系」の小説と考えるなら、面白く読める作品でありながらシリアスな内容をも兼ね備えているという評価になるだろう。

20210820

10年ほど前に出た本だが、Sheila Fitzpatrick, *My Father's Daughter*, 2010 という本を目録で見つけて、取り急ぎ注文して購入した（手もとに届いたばかりで、中味はまだパラパラとしか見ていない）。

シーラ・フィッツパトリックといえば、ソ連史研究者たちの間では誰一人知らぬ者のいない、押しも押されぬ大家である（1941年生まれだから、現在80歳）。どちらかといえば「玄人好み」の学風であるため、専門の歴史家以外の間ではそれほど広く知られておらず、邦訳書もないが、若い時期から数十年にわたってたくさんの単著と編著を出し続け、数多くの弟子を養成していて、斯界における存在感は抜群である。それでいながら、彼女が老境に入ってからでも旺盛な著作活動をしていることは、日本ではあまり知られていない。私も最近までよく知らなかったし、日本語版ウィキペディアで彼女の項目を見ると、単著で最新作として挙げられているのは *Tear Off the Masks!*, 2005 であり、その後に5冊もの単著を出していることが触れられていない（英語版ウィキペディアはもっとずっと詳しい）。今回入手した本は、タイトルからも窺えるように、自分の父親との関係を語った書物。彼

女の父親ブライアン・フィッツパトリック（1905-65年）は、よくは知らないが、オーストラリアのジャーナリスト兼歴史家だったらしい。シーラの弟デイヴィッド（1948-2019年）も歴史家（専門はアイルランド史）だったから、歴史家一家ということになる。シーラは少女時代にはこの父親の強い影響下にあったが、やがて父から離反したようで、オーストラリアから遠く離れたイギリスに留学して、E・H・カーのもとでソ連史を学んだ。その後はアメリカのいくつかの大学に長く勤めて、ほとんどもっぱら「アメリカの学者」として知られていたが、歳をとってから改めて亡き父との関係を振り返ろうと思いついたようだ（故国との接点も長らく小さかったようだが、本書刊行2年後の2012年にオーストラリアに戻り、現在もそこに住んでいるという）。長い反抗と断絶の後に、父親および故国とどのような形で向かい合おうと思うようになったのか——本書は単なる懐旧談や家族の記録ではなく、歴史家にふさわしい資料探索を踏まえた研究書になっているようだ。本書の後、彼女は専門のソ連史の領域で、自伝的要素を含む *A Spy in the Archives*, 2014 や *On Stalin's Team*, 2015 を書いただけでなく、かなり異なった方向に手を出して、*Mischka's War: A European Odyssey of the 1940s*, 2017 および *White Russians, Red Peril: A Cold War History of Migration to Australia*, 2021 を書いている（前者は未入手、後者は入手したばかりで未読）。いずれも彼女にとって新しい領域でありながら、マルチアーカイヴァルな調査を踏まえた本格的学術書になっているようだ。最新著はまさしく80歳を迎えた本年に刊行された。その精力的な仕事ぶりには感嘆するほかない。

20210824

タリバーンが女性の権利を含む基本的人権や自由の保障を声明していることに関して、とりあえずそれを信頼して、今後の変化に期待しようという意見と、これはしょせん空約束に過ぎず、とても信頼などできないという意見とがある。アフガン情勢に関して無知な者の一般論的感想だが、この種の問いに関しては予め決まった答えがあるわけではないのではなかろうか。おそらくタリバーンの中にも様々な人がいて、この種の声明を真剣に考える人たちもいれば、そうでない人たちもいることだろう。そのどちらが優勢になるかは、直接には国内での力関係によるが、外部の諸国の対応に規定される面もあるのではないか。欧米をはじめとする諸外国からのタリバーン不信と封じ込めが強まれば、アフガニスタン内で欧米諸国への不信と対抗意識が強まり、それに伴って、硬直した政策をとろうとする人たちの勢いが強まる可能性が高い。そうすると、「タリバーンは人権や自由を尊重しない勢力だ」という言説は結果的に「自己成就する予言」となるかもしれない。

20210922

渡辺浩『明治革命・性・文明——政治思想史の冒険』（東京大学出版会、2021年）。大分前にいただいていたが、諸事に取り紛れ、すぐは手が出なかったが、このほどようやく読み上げた。

歯切れのよい文体で、多くの人が漠然といただいている「通念」「常識」を次々と引っ繰り返して、目から大きなうろこをバラバラと叩き落とす書物であり、そのさまは壯観、読後感爽快である。中でも、「性」を主題とする第Ⅲ部は、日本・中国・ヨーロッパにおける「性」に関わる観念がいかにわれわれの常識的な想定と異なっていたか、そしてそれが

権力のあり方をどのように規定していたかを論じて、鮮烈な印象を残す。他の各章を含め、全体として、あまりにも鮮やかに通念を覆すため、一読して「すごい」と唸った後、「ひょっとしたら、著者の見事な叙述に幻惑され、欺かれてしまったのではないか」という疑念が浮かぶ面がないわけではない。しかし、日本政治思想史に通じていない人間がその疑問を定式化して著者に論争を挑むのは、相当ハードルが高い。私は長いこと著者と歳の近い同僚だった関係で、個人的に会話する機会も多く、著作も網羅的でないまでもかなり読んできたことから、著者の考えは結構分かっているつもりでいた。しかし、本書を読んで、その理解はずいぶん浅かったことを思い知らされた。著者の見識は、空間的には日本だけでなく中国・朝鮮およびヨーロッパ世界を広く包括し、論点としては狭義の政治をはるかに超えた諸領域にわたっていて、その該博さは読む人を圧倒する。こうした相手と論争するには、相当な蛮勇が必要とされる。

実をいうと、私はかつて一度だけ、ある研究会で蛮勇をふるって著者と論争をしたことがある。主題はE・H・カーの『歴史とは何か』の評価であり、そのとき私は、「日頃周到な議論を特徴とする渡辺さんが、ことカー評価に関しては、どうしてこんなに乱暴な議論をするのだろうか」という不思議の感に打たれた記憶がある。いま改めてその論争を再開・継続したらどういう議論になるのか——楽しみなような、怖いような、複雑な思いが胸をよぎる。

20210927

先週末（9月25-26日）に政治学会大会がオンラインで開かれた。

#### 【1日目】

昼食にあたる時間帯に「メソッド・カフェ」というものがあつた。これは報告者を立てることなく、緩やかに関連する分野の方法論に関心を持つ人たちが自由に話し合うという企画らしかった。私は「政治史／政治思想史方法論」というテーマに関心があり、ちょっと覗いてみようかとも思ったが、若い人たちの自由な討論に年寄りが顔を出すと異分子感が大きいのではないかという気がして、パスすることにした。

午後の第1セッションは分科会B7「「新冷戦」とは何であったか」というパネルに出て、山本健（ヨーロッパ）、三宅康之（中国）、吉留公太（アメリカ）の3報告を聴いた。山本、吉留の両氏は、以前に著書を読んだことがあり、メールで意見のやりとりをしたこともあるので、話もよく分かったし、共感するところが多かった。期せずして、二人とも「新冷戦」という問題設定自体の有効性に疑念を提出していたのが面白かった。他方、三宅報告は私にとって馴染みの薄いものだったが、1970年代末から80年代半ばの中ソ関係を論じていて、勉強になった。この時期に中ソの対立状況を打開しようという試みが始まっており、それがゴルバチョフの訪中につながったという連関を知ることができたのが収穫。

午後の後半は、共通論題「政治学の役割とは何か」。大上段に振りかぶった課題設定に対して、待取聡史、粕谷祐子、遠藤乾の3氏がそれぞれの角度から報告を提出した。各報告者の学問的立場からすればこういう議論になるのだろうということは一応分かるが、私自身の問題関心とはあまりかみ合わなかった。それは私が「風変わりな政治学者」だからだが、とにかくどうやって対話を交わすことができるのかを考え込まされた。1点だけ内容に触れておくなら、粕谷報告で「民主化の第3の波」までの時期については、「何年何月

何日をもって」この国は民主化したと判別することが難しくなかったとあったのが気になった。この見方はソ連のペレストロイカにもその後のエリツィン時代にも全く当てはまらない（この点については、拙稿「民主主義の後退」か「民主化論」の陥穽か『UP』2021年9月号で書いた）。当日、この点に関して質問したところ、地域によって異なるというような回答だった。そういう面は確かにあるだろうが、プシェヴォスキ自身が元来ポーランド出身ということ想起するなら、ペレストロイカに無関心だったのは考えにくい。そもそも「民主主義かそうでないか」という二者択一的な問いを立てて二値的に答えるという発想自体の当否は、もう少し基本的な再検討が必要なのではないだろうか（当日の三牧聖子氏のコメントもその点に触れていた）。

## 【2日目】

午後の分科会E2の書評ラウンドテーブル「政治学から見る等身大のMax Weber」を聴講した。自らウェーバー論を専門とする水谷仁氏と、「専門の遠い者が眺めると……」と題する渡辺浩氏が書評報告を提出し、書評対象者たる野口雅弘、今野元氏が応答するという企画。

水谷報告について私の言えることはほとんどないが、ロシアにおけるウェーバー受容に触れながら、（鈴木健夫、肥前栄一、小島修一、小島定等々の錚々たる論者たちを度外視して）とりたててこの問題に通じているわけではない袴田茂樹だけを引き合いに出していたのはちょっと残念だった（この箇所はペーパーにあるだけで、当日の報告では省かれた。もともとあまり重要性を付与されていなかったのかもしれない）。

渡辺報告は例によって切れ味のよいものだったが、ウェーバーの中国論・儒学論はまるで低水準でお話にならないという指摘は、ある意味では当たり前のことではないかという気もした。渡辺氏の学識からすれば、ウェーバーをこの角度から批判するのはたやすいことだろう。だが、ウェーバーの『儒学と道教』が中国論の書だとか『ヒンズー教と仏教』がインド論の書だという理解そのものへの批判も一部にはあるようであり、そうした点を含めて、もっと異なった角度からの接近がありうるのではないかという気がした（野口氏も今野氏もそれぞれの角度からこれに応答していた）。他方、ウェーバーの考える「主体性」がもっぱら男性だけを念頭においたものではないかというジェンダー論からの問題提起は、いかにも渡辺氏ならではのもので、非常に刺激的だった。

その後の討論で、野口、今野両氏は両報告者から提起された疑問に丁寧に答えていた。それ以外の人たちからのコメントを含めて、数多くの対立点にもかかわらず、議論をすれ違いに終わらせることなく、論点をかみ合わせようとする試みが積み重ねられたことに感銘を受けた。組織者たる作内由子氏の労を多としたい。

直接聴講したのは以上だが、それ以外に、ホームページに掲載されたペーパーのうちから、大園誠氏の「戦後民主主義」形成における丸山眞男の役割」、および石川敬史氏の「2020年の大統領選挙を分析する：政治思想史の観点から」を読んだ。石川氏はアメリカ建国期の思想史が専門らしいが、長期的な視点からアメリカにおける「リベラリズム」の特殊性を解き明かし、デモクラシーがそれに反逆するという現象に着目して、トランプ現象をそうした文脈に位置づけるもので、勉強になった。

もともと「政治学者らしくない政治学者」である私にとって、政治学会は「ホーム」のようでありながら実は「アウェイ」な場だという感覚がずっとあった。今もそれは変わらな

いが、それでも長らく参加している間に、「他者」（「普通の政治学者」）の感覚を窺い知ることがある程度できるようになり、何とか意思疎通することができるのではないかという気がしてきた。昨年の大会は、拙著の校正作業に追われている時期で、まともに参加することができなかったが、今年はそれを取り戻すべく、いくつかのセッションを聞いたり、ペーパーを読んだりして、頭を刺激された。